

平成 19・20 年度 JSL カリキュラム実践支援事業実施報告書【授業実践】

実施団体名【 芦屋市教育委員会 】

1 学習活動の実際

(1) 学習指導要領での指導学年と領域 第3学年 (量と測定)	
(2) 単元名または活動名 「 かさ 」	
(3) 対象児童の実態 (2人)	
A 児	第3学年 国籍 (フィリピン) 母語 (フィリピノ語) 在籍年数 (2年9ヶ月)
	<ul style="list-style-type: none"> 父親の国籍は日本、母親の国籍はフィリピン。3歳までフィリピンで過ごし、幼稚園入園より日本で、母親方の祖母と過ごす。4歳まで発語がなく、当初はフィリピノ語が中心の生活を送る。父親は単身赴任をしており、家庭での言語環境が、母親の不十分な日本語、祖母のフィリピン語であった。現在では、日常会話はほぼ理解できている。母語は書くことがほとんどできない。そのため、本児にとって最も得意な言語は不十分な日本語になりつつある。漢字については、まだ不十分であるが、既習学年の漢字については約60%程度書くことができるようになってきた。 学習活動に対して前向きに取り組みにくい。2年時には、学習活動に興味を持たないと、席から離れ教室を徘徊することも見られた。
B 児	第3学年 国籍 (オーストラリア) 母語 (英語) 在籍年数 (2年9ヶ月)
	<ul style="list-style-type: none"> 日本語での日常会話はほぼ理解できており、漢字についても当該学年の文字については理解できている。 言い回しなどにも慣れて、教科書を読み取り、その内容の大意をつかむことができるが、新しい事柄の理解には時間がかかる。
(4) 目標	
◇【教科指導の目標】	
<ul style="list-style-type: none"> • 普遍単位(リットル、デシリットル、ミリリットル)を理解し、身の回りの容積表示を進んで見つけ、適切な大きさのますを使ってかさの測定ができる。 • かさの普遍単位の必要性について考えることができる。 • かさを「リットル」「デシリットル」「ミリリットル」の単位で表したり、ますを使ってかさを測定することができる。 • ますの使い方や、かさの単位「リットル」「デシリットル」「ミリリットル」の読み方、書き方、相互関係がわかる。 	
◆【日本語指導の目標】	
<ul style="list-style-type: none"> • 「かさ」という言葉の意味を理解する。 • 「どちらが・・・」という表現を理解し、使用することができる。 	

2 学習活動

指導者（日本語指導担当教員） 指導補助者（なし）			
全体の時間数（1時間） 「かさ」の導入時に行う。			
学習活動の状況、指導内容	活動方法	指導上の留意点	有効だった指導等 ◇教科指導について ◆日本語指導について
① どちらに多く、水が入っているか考える。 ・同じペットボトルで量の異なる色水を比べる。 ・形の異なる容器で、どちらが多いか、考える。	取り出し	・同じペットボトルで量の異なる水を用意して、実際に触りながら考えさせる。 ・具体的操作を入れることで、体験的に学習させる。	◇ 「かさ」という言葉についての経験の有無を確認する。 AU A-3 ◆T：どちらが多く入っていますか？ ◆S：こちらのほうが多く入っています。
② 調べ方を考える。 ・2つの容器だけで比べる。 (直接比較)		・児童が考えつかない場合は、容器を並べて、教師が実際にやって見せる。	◇色水の入った容器と同じ大きさの空の容器を示し、比べ方を考えさせる。
・2つの容器より多く入る容器を使って比べる。 (間接比較)		・児童が考えつかない場合は、教師が実際にやって見せる。 「じょうご」の提示時には日本語名称も導入する。	◇色水の入った容器より、大きな容器とじょうごを示し、比べ方を考えさせる。
・2つの容器より小さい容器を使って、何ばい分あるかで比べる。 (任意単位による比較)		・児童が考えつかない場合は、教師が実際にやって見せる。	◇任意単位になる小さな容器を多数示し、比べ方を考えさせる。
③ 「かさ」という言葉の意味を覚える。		・「比べる」 ・「どちらが…」 などについても言語を確認し、繰り返して聞かせ、発音させる。	◆ 「かさ」の説明を、ペットボトルの中に入れた絵の具で説明する。 ◆ 「水かさ」など「かさ」を使った言葉に注目させ、くりかえして言わせる。 AU F-6

3 成果

① 対象児童に対する成果

〈教科指導の成果〉

- 「かさ」という言葉について、A、B ともに聞いたこともなかった。具体的な作業を通じて、「かさ」という言葉の示すところを理解することができた。
- 普遍的単位である「リットル」「デシリットル」「ミリリットル」について、身近なものとして感じるができるようになり、本時以後の学習においても、積極的に学習に取り組むようになった。また、おおよその量を推測できるようになった。
- 本時以降の授業において「かさ」についての加減の計算ができるようになった。

〈日本語指導の成果〉

- 具体物などを提示し体験させることでより一層理解しやすくなった。
- 「かさ」という概念について、実際に目で見て、触って、言うてみることで、A,B 児ともにより理解が深まった。

② その他

教室に様々な容器を置くことで、「リットル」「デシリットル」の理解が深まった。今後も、学習したことを日常生活の場で活かし、学習への意欲を高めていきたい。

4 課題

〈教科指導の課題〉

- 本時の学習を通じて、本児についても他のクラスの児童についても、体験を通して学ぶことの重要性が認識された。しかし、まだ体験活動を取り入れた学習が十分なされていない。より体験を重視した学習活動の構築が課題である。
- 体験活動を行う上で、在籍学級担任との連携が不可欠であり、各種活動を通じて連携を密にしていく必要がある。

〈日本語指導の課題〉

- 「かさ」等の日常生活の場面において、使用する頻度の少ない言葉についてはなかなか定着しないので、期間をあけて繰り返し指導することで定着を図りたい。
- また、逆に「かさ」という言葉について、1 時間を使って学習する必要があるのかどうかは疑問である。生活及び学習言語としては必要性が薄いように感じる。